

ポーランド語における家族間での対称詞使用に関する一考察

川本 夢子

A Study of Polish Address Forms Used to Family Members

Yumeko KAWAMOTO

Abstract

The following article describes the contemporary use of Polish forms of address in communication with family members. Traditionally, parents and grandparents were addressed using kinship terms such as *tata* (dad)/ *mama* (mom)/ *dziadek* (grandpa) / *babcia* (grandma) in combination with the 3rd person singular verbs. By the end of the 20th century, the 2nd person form of verbs started to dominate in use, although the 3rd person form has not been abandoned yet. In order to investigate the contemporary usage trend and linguistic awareness of speakers, I conducted research by distributing a questionnaire among 430 Polish native speakers. In the questionnaire, the informants were asked to choose from 2-3 address options the one with which they typically address their parents, grandparents, parents-in-law and children's partners.

The informants showed a preference for the 2nd person form of verbs, especially as an address form to parents. Some of them declared that they use a "mixed" form as an intermediate form, which is a combination of kinship terms with the 2nd person form of verbs. When addressing grandparents, this "mixed" form is used less frequently and more informants opted to use the 3rd person form of verbs, which is a more traditional way of addressing. There were also comments on use of impersonal forms to parents-in-law, which can be understood as an address form with a certain distance. The most dominant way of addressing children's partners is the simple use of the 2nd person form.

According to data from the questionnaire, there was no generational or regional difference, which means that the trend to use the 2nd person form to family members is generally observed throughout Polish society.



目次

1. はじめに：本稿における対称詞の位置づけ
2. 先行研究概要
3. アンケート調査
 - 3.1 調査方法
 - 3.2 調査結果・考察
4. おわりに

1. はじめに：本稿における対称詞の位置づけ

日本語の人称表現で用いられる語に関して、ヨーロッパ諸語の多くで見られるような「一人称」「二人称」「三人称」の代名詞というカテゴリーで捉えるのではなく、それぞれ「自称詞」「対称詞」「他称詞」とするのが適当だという見解がある(鈴木 1973: 134)。これは日本語の人称表現で代名詞的に用いられる語ひとつひとつの形式的・意味的変遷が激しく、人称代名詞としての明確な位置づけが困難であるという特徴を踏まえた考え方であり、語源を共有し長い歴史を持つ西欧語の人称代名詞¹との違いが強調されている(鈴木 1973: 140)。しかしながら、こういった議論の中で取り上げられるいわゆる西欧語の括りに当てはまらない言語が存在することも事実であり、日本語における「自称詞」「対称詞」「他称詞」の概念でより詳しい人称表現の説明が可能になる場合もあるのではないかと考えられる。本稿ではその一例としてポーランド語を取り上げ、特に家族間で用いられる対称詞について考察したい。

多くの言語で二人称表現は親称と敬称に分類され、権力(power)と連帯意識(solidarity)を軸としたT/V理論の中で親称と敬称それぞれの使用要因を考察することが可能である(Brown & Gilman 1960: 255-261)。ポーランド語の場合もこのT/V理論に当てはめた議論が可能であり、親称と敬称にそれぞれ対応するものとして単数では*ty*と*pan/pani*が用いられ、複数では*wy*と*panowie/panie/państwo*が使い分けられる(Łaziński 2006: 19, Markowski 2018)。ただし敬称として認識されている*pan/pani*などの語が、もともとシ

ュラフタと呼ばれるかつてのポーランド貴族の社会で用いられていた肩書表現に由来している³ことから、ポーランド語で敬称として用いられる人称詞⁴を人称代名詞とすべきか、あくまで肩書表現としての名詞とすべきか、ポーランドの言語学界でもいまだはっきりと共通の認識が定まっていない⁵。すなわち、ポーランド語の二人称表現で用いられる人称詞に関しては、日本語の場合と同様、二人称代名詞の括りではなく対称詞として捉えることにより、より正確な記述が可能になると考えられる。

ポーランド語の敬称*pan/pani*などの語に関して、的確な文法的記述を提示することが困難であることは既述の通りだが、ポーランド語の二人称表現で用いられる人称詞を対称詞として捉えるべき重要な理由がもうひとつある。親称と敬称を人称代名詞の枠組みで捉えているHuszczkaの記述で、*pan/pani*などの語とは別のグループに属する語が記されており(Huszczka 2006: 99)、具体的には家族間で用いられる*dziadek*(祖父)、*mama*(母)など⁶が挙げられている。これは親や祖父母に対し動詞の三人称形を用いる場合を念頭に置いた分類だと考えられ、動詞の三人称変化を要求する点においては敬称で用いられる*pan/pani*などの語と共通しているものの、一般的に広く用いられる*pan/pani*とは異なり使用範囲が家族間に限定されているため、Huszczkaの記述では別枠の扱いとなっている。家族間で動詞の三人称形および二人称形をそれぞれ用いた文として、以下*mama*(母)の語を含むHuszczkaの例文「お母さん、おばあちゃんが8時に教会に行かなきゃいけないことを(お母さんは)忘れてたの?」(Huszczka 2006: 108)を二種類挙げて説明を試みたい:

【1】

Mamo,	czy	mama	zapomniała,	że
mom-F.SG.VOC.	Q	mom-F.SG.NOM.	forget-PF.PAST.3.F.SG	that
babcia	ma	ić	do	
grandma-F.SG.NOM.	have-IMPF.PRES.3.SG.	go-IMPF.INF	to	
kościół	na	ósma?		
church-M.SG.GEN.	at	eight-F.SG.ACC.		

【2】

Mamo,	zapomniałaś,	że	babcia
mom-F.SG.VOC.	forget-PF.PAST.2.F.SG.	that	grandma-F.SG.NOM.
ma	iść	do	kościół
have-IMPF.PRES.3.SG.	go-IMPF.INF.	to	church-M.SG.GEN.
na	ósmą?		
at	eight-F.SG.ACC.		

例文【1】では、*mama*の語に動詞の三人称形が続いていることから、敬称の*pan/pani*と同様の用法として捉えることができる。相手に直接向けられた発言であることから二人称的な表現ではあるものの、文法的には三人称形が用いられているのである。一方例文【2】では、*mama*の語が最初に呼格⁷で用いられているものの、以降は動詞の二人称形が続いている⁸。この例文【2】は文法的にも二人称形が用いられている点において、例文【1】とは異なる。例文【1】のように*mama*の語が動詞の三人称形と結びつく用法は古形として捉えられており、現代ポーランド語の一般的な用法からは外れてきているともされるが、引き続き一部の世代や地域コミュニティによってこの表現が用いられていることも事実である（Huszcza 2006: 108-109）。したがって、このような動詞の三人称形と結びつく固有名詞的性格の強い語も含め、ポーランド語の二人称的表現で用いられる人称詞は対称詞として記述するのが適切だと言える。

以上をふまえ、本稿ではポーランド語における対称詞を二人称的表現で用いられる人称詞の総称として位置づけ、議論を進めていく。本研究では特に家族間での対称詞使用に焦点を当て、対称詞に続く動詞の三人称形と二人称形がそれぞれどの程度の割合で用いられているのか、またその背景にどのような言語使用意識があるのかを明らかにするため、先行研究の記述及び筆者が独自に行ったアンケート調査の資料をもとに考察を行う。

2. 先行研究概要

ポーランド語の家族間言語 (*język familijny*) が学術研究の課題として最初に取り上げられたのは20世紀初頭のことで、当初は方言研究としての性格が強かった⁹。特定のコミュニティ内 (家族間) で使用される言語という認識から標準ポーランド語とは切り離された存在として扱われる傾向にあったが、20世紀末ごろになると、ポーランドの言語社会全体の中の一現象として捉えられるようになった。家族間での言語使用について多くの研究を残している Handke によれば、家族間言語は特に話し言葉としての性格が強く、親密かつ持続的な関係性において用いられる言語だとされる (Handke 2021: 76)。また Handke は家庭の「外」と「内」でそれぞれ家族を表す語が変化する事象にも注目し、これを一種のバイリンガリズムとして捉えている。例えば、家庭の「外」では親について言及する際 *ojciec* (父) ; *matka* (母) という基本的な語形を用いるのに対し、家庭の「内」では呼称としてそれぞれ *tata/tatko/tatus* (父) ; *matulka/mateńka/matusia/mamusia* (母) といった具合に指小形など¹⁰を用いる場合があり、これはコードスイッチングの一例として捉えることができる (Handke 2021: 91-92)。家族間で用いられるポーランド語対称詞の指小形は人名学の研究でも取り上げられ、親族呼称だけではなく個人名の使用における指小形の出現についても考察が行われている (Malec 2001: 71)。

家族間言語の調査が方言研究の分野で注目されてきたことは先述の通りだが、村落の言語文化に関する記述からは家族間で用いられている対称詞の歴史の変遷を読み取ることができる。ポーランド南部に位置するクラクフ周辺の村落で言語調査を行う Sikora は、かつて親に対する呼称として「敬称+親族名称」の形が用いられていたことについて、次のように記している：

Dawne teksty przekazały nadto świadectwa o występowaniu także dystansowego *panie ojciec/pon ociec, pani matko* (...) – dwuznacznego, bo nazywano tak również teścia i teściową. Jednak to nie one najczęściej gościły na ustach dzieci, od których oczekuje się wyrazistej deklaracji więzi uczuciowej z rodzicami i uczy pożądanego zachowań. (...) Po dziś dzień w szanującej się wiejskiej rodzinie słyszy się przede wszystkim: *tato, mamo* (...). (Sikora 2010: 129)

古い資料からは、距離を置いた表現 *panie ojciec/pon ociec, pani matko* の使用を確認することができ、(...) これは義理の親に対しても用いられていたため二重の意味を持つ。しかしこの用法は、親との間に感情的な結びつきを感じ、彼らからしかるべき振る舞いを学ぶ子どもたちの口から頻りに発せられる表現では決してなかった。(...) 今日では家族をお互いに尊敬し合う村落の家庭でも *mamo, tato* (...) の形が最も多く用いられている。

かつて親に対して *pan ojciec, pani matka* のような「敬称+親族名称」が用いられていたことは Handke の記述 (Handke 2021: 103) から読み取ることができる¹¹ が、Sikora の研究では義理の親に対する呼称が詳しく取り上げられている点が興味深い。Sikora は 16 歳で嫁入りしたインタビュー回答者の女性について言及しながら、かつて特に村落では女性の結婚が早かったため、義理の親との大きな年齢差も影響しこのような「敬称+親族名称」の使用が見られたのではないかと考察している (Sikora 2010: 136)。逆方向の呼称 (親から子供の結婚相手に対して使われる呼称) については、相手の名前を直接用いるのが一般的だとし、*zięciu* (義理の息子) や *synowo* (義理の娘) といった親族呼称¹² が用いられるのは、意識的に距離を置いている場合あるいは冗談めかして相手を呼ぶ場合であると記している (Sikora 2010: 137)。

代表的な先行研究で言及されている内容として、親および義理の親に対する対称詞使用の他にもう一つ、祖父母に対する対称詞使用がある。Sikora は、村落のコミュニティにおいては祖父母に対し特に敬意を表すことに触れ、地域によっては呼称として用いられる対

称詞 *dziadek* (祖父) や *babka/babcia* (祖母) に加え動詞も (一人の相手に対し) 二人称複数形もしくは三人称 (単数もしくは複数) で出現すると記している (Sikora 2010: 132)。標準的な現代ポーランド語では、親・祖父母どちらに対しても直接二人称単数形の人称表現を用いることが一般的な傾向とされる (Rajchert 1991: 48) 一方で、村落のポーランド語社会では祖父母に対して引き続き二人称複数形¹³ や三人称形が用いられている。Sikora は、村落のコミュニティでも親に対しては二人称単数形を用いる傾向が強まっていると述べているが (Sikora 2010: 131)、祖父母に対する人称表現ははまだ古い形が残されていることを強調している。

ここまで方言研究の分野における家族間の対称詞使用について述べてきたが、方言研究とは異なる視点、すなわち標準ポーランド語の存在を見据えた視点から記述している研究もある。Kielkiewicz-Janowiak (2011) は家族間の対称詞使用の中でも特に子どもから親に対する対称詞使用に着目し、歴史的背景を踏まえたそれぞれの対称詞の変化や、世代ごとの対称詞使用における違いなどについて考察を行っている。この研究で特徴的なのは対称詞と動詞の人称変化形の組み合わせによって 4 つの発言パターンが提示されている点であり、Kielkiewicz-Janowiak はこの 4 パターンを基準に行われたアンケート調査およびインタビュー調査の結果から、ポーランド語の対称詞について最新の使用傾向を読み取っている。4 つの発言パターンの具体的な内容は以下の通り (括弧内は Kielkiewicz-Janowiak が用いている記号¹⁴) :

- ①動詞の三人称形、呼称なし (KT3) = 既出例文【1】の呼称 *mamo* が欠けた形
- ②動詞の三人称形 + *tata/mama* の呼格 (KT3 + KT) = 既出例文【1】と同じ
- ③動詞の二人称形 + *tata/mama* の呼格 (2p. + KT) = 既出例文【2】と同じ
- ④動詞の二人称形、呼称なし (2p. no KT) = 既出例文【2】の呼称 *mamo* が欠けた形

Kielkiewicz-Janowiak はアンケートとインタビューを組み合わせた調査を二種類実施している。双方の調査で各 20 の場面¹⁵を設定し、それぞれの場面において上

記 4 つの発言パターンから回答者が日常的に用いる形をひとつ選択するという方法がとられた (表 1¹⁶参照)。

表 1

	回答者数 (人)	年齢層 (歳)	居住地域	アンケートの内容	インタビューの内容
調査 1	50	17-19	都市部	Part 1: 親に対する対称詞使用の 4 パターンからひとつを選択 Part 2: 自分が用いている人称形を文法的観点から選択	対称詞使用とそれに関連した問題や価値観、規範意識について、また対称詞使用が変化した経験について
調査 2	Group A: 12 Group B: 12	Group A: 17-19 Group B: 29-39	都市部	Part 1: 親と義理の親に対する対称詞使用の 4 パターンからひとつを選択 Part 2: 自分が用いている人称形を文法的観点から選択	親子関係、また対称詞使用に関する違和感について

これらの調査結果から、かつて広く用いられていた親に対する動詞の三人称形の使用率 (パターン①および②) は減少し、動詞の二人称形、特に *tata/mama* の呼格との組み合わせで用いられる形 (パターン③) がより一般的になりつつあり、特に若い世代は動詞の三人称形をほとんど用いない傾向にあると Kielkiewicz-Janowiak は述べている (2011: 54)。対称詞を動詞の三人称形と組み合わせる用法はフォーマルな印象を与えるため、子どもから親への対称詞使用が二人称寄りになっていることはすでに他の研究でも指摘されている (Pisarkowa 1979: 9) が、標準ポーランド語が用いられている都市部の話者を対象とした Kielkiewicz-Janowiak のこの調査によって、親に対する対称詞使用は動詞の二人称形の使用と結びつく傾向にあることが

より明確に証明された。一方で、調査対象者の世代を考慮してはいるものの世代グループごとの人数が極めて少ない点や、調査が実施された 1994 年からある程度時間が経過しているため最新の傾向としての信ぴょう性に疑問が残る点、また義理の親への対称詞使用について詳細な考察が記されていない点など、補うべき項目が複数見られる。考察のまとめとして、将来的には対称詞を用いないシンプルな二人称形の使用が一般的になっていくのではないかという見通しについても言及されているが (表 2¹⁷参照)、動詞の二人称形使用に対称詞を付け加えた形 (パターン③) と対称詞を用いない形 (パターン④) における言語使用意識の違いについても、さらに詳細な記述が必要だと考えられる。

表 2

年代	対称詞使用の傾向
19 世紀末～ 20 世紀	<i>ojciec/mama</i> + 動詞の三人称形
1990 年代	<i>tato/mamo</i> (対称詞の呼格) + 動詞の二人称形
将来的な見通し	対称詞を用いない、動詞の二人称形のみ

以上に示した先行研究の成果をふまえ、本稿では主に Kiełkiewicz-Janowiak (2011) の研究を補うものとして実施した筆者独自のアンケート調査について、量的・質的双方の観点から記述していく。また方言研究における本テーマの重要性も尊重し、特に親と祖父母への対称詞使用に関しては世代や地域別の傾向についても考察を行う。

3. アンケート調査

本研究では、アンケート調査から得られた統計データおよび回答者のコメントを資料として用いる。このアンケート調査により、量的研究と質的研究双方の観点から考察が可能になると考えられる。

3.1 調査方法

アンケートは4部構成で、最初のセクションでは回答者に関する基礎情報を収集するための質問を設けた。具体的には、年齢、性別、居住地域（大都市、小都市、村落¹⁸）、学歴（中卒、高卒、大卒以上）、外国語の知識、海外在住経験（3年以下／以上）についての項目¹⁹を設定し、特に性別、居住地域、学歴の項目は入力必須とした。二つ目のセクションでは対称詞使用に関する質問を複数設け、具体的には親、祖父母、義理の親、子どもの結婚相手、学校の先生、初対面の子どもに対しそれぞれどのような対称詞を用いるか選択式の回答項目を設定した²⁰。「その他」の項目を選んだ場合は、具体的にどのような対称詞を用いるか自由記述の欄に記入を求めた。この自由記述の欄は自分の回答にコメントを付け加えることができる機能を用い、「その他」以外の項目を選択した場合でも記入できるようにした²¹。残り二つのセクションでは親称を用いる関係および職場での対称詞使用についての質問を設けたが、家族間の対称詞使用に関して考察を行う本稿では取り上げないこととする。

アンケート上の質問項目はすべてひとつの画面に掲載し、回答者が質問数と質問の順番を把握しやすいよ

うページの切り替えがないレイアウトに設定した。また一人の回答者が複数回答するリスクを避けるため、一つの電子機器からの回答は一度だけ可能な状態に制限を設けた。アンケートはポーランドのインターネットサイト Ankieter.pl (<https://www.ankieter.pl>) 上で作成し、2020年12月1日からリンク共有による限定公開を可能とし、筆者の Facebook ページから URL を拡散できる環境を整えた。一部の回答者には筆者が直接メールで URL を共有し、同時に知り合いへのアンケート拡散も求めた。アンケートは2021年2月28日に非公開となり、筆者のみが結果集計の目的でアクセスできる状態となった。

アンケートを非公開にしたのち、Ankieter.pl のサイト上でダウンロードできる Excel データから結果を集計し、選択式の項目からは統計データを、記述式の項目からはテキストデータをそれぞれ抽出し、内容の分析を行った。

3.2 調査結果・考察

集まった回答数は最終的に430件となり、量的研究の観点からも満足のいく回答数を得ることができた。本稿では家族間の対称詞使用に関する項目、すなわち親、祖父母、義理の親、子どもの結婚相手への対称詞使用についての回答を取り上げる。

A) 親

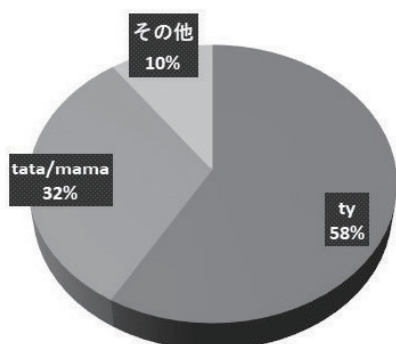
親への対称詞使用に関する項目では、「あなたは親に対しどのように話しかけますか？」という質問に対し、以下の選択肢が与えられた：

- tata/mama (例：Czy tata/mama napije się herbaty?²²)
- ty (例：Czy napijesz się herbaty?)
- その他 (コメント欄に記入してください。)

結果として、半数以上(58%)の回答者が親称の *ty* (動詞の二人称形) を選択し、続いて32%が *tata/mama* (動詞の三人称形) を、10%が「その他」を選択した(グ

ラフ1)。

グラフ1：
あなたは親に対してどのように話しかけますか？



この結果から親に対して動詞の三人称形を用いる人が一定数いると考えられるが、自由記述の欄に記入されたコメントからは興味深い内容を読み取ることができる。43名の回答者が「混合形」(forma mieszana²³)つまり「対称詞 *tata/mama* (呼格もしくは主格²⁴) + 動詞の二人称形」を用いるという内容のコメントを残しており、43名のうちこの「混合形」が *ty* (動詞の二人称形) と *tata/mama* (動詞の三人称形) のどちらにも当てはまらないと判断した回答者が36名²⁵いた。Kielkiewicz-Janowiak (2011)の研究でも動詞の二人称形 + *tata/mama* の呼格という発言パターンがアンケート調査の回答項目(発言パターン③)として取り入れられているが、どのような意識が働いてこの形が用いられているのかという点については記述がない。今回筆者が行ったこのアンケート調査のコメント欄でこの形を43名の回答者が「混合形」と表現していることから、動詞の三人称形とともに用いる *tata/mama* ほどフォーマルなものではないが、対称詞 *tata/mama* の存在により完全な親称(動詞の二人称形)とも区別されるという認識を読み取ることができる。この「混合形」が用いられる場合、対称詞 *tata/mama* が呼格(*tato/mamo*)になるとコメントした回答者は30名、指小形(*tatus/mamus* など)について言及している回答者は8名、主格のまま残すとした回答者は5名だった。親族

名称は呼格で出現することが多いとする先行研究の記述(Kielkiewicz-Janowiak 2011)や家族「内」では指小形が用いられる傾向にあるという指摘(Handke 2021)とも一致する結果となった。

親への対称詞使用に関する質問を設定する際、筆者は動詞の三人称形および二人称形という文法的観点から見た人称の区別に着目し選択肢を設けたが、一部回答者の残したコメントから、「完全な三人称形」と「完全な二人称形」の間には大きな差があり、その中間地点として「対称詞 *tata/mama* + 動詞の二人称形」という「混合形」が用いられていることがわかった。先行研究の記述では、将来的に「完全な二人称形」の使用(対称詞 *tata/mama* の不使用)に移行する傾向が予想されている(Pisarkowa 1979, Kielkiewicz-Janowiak 2011)が、少なくとも現時点では対称詞を動詞の二人称形と組み合わせることにより、「完全な二人称形」とは区別しようとするポーランド語話者が一定数いることが証明された。一方で、回答として「その他」を選択せず、*ty* (動詞の二人称形)あるいは *tata/mama* (動詞の三人称形)を選びコメントを残さなかった回答者の中に、「混合形」を用いる回答者が含まれている可能性も否定できない。したがってより正確なデータを収集するためには、追加のインタビュー調査など回答者それぞれに対する個人的なアプローチが必要になってくる。

世代別の結果(表3)を見ると、20代から50代まではどの年齢層も親に対し親称の *ty* (動詞の二人称形)を用いる割合が高いことがわかる。

表3

	tata/mama	ty	その他
19-29 歳	32%	56%	12%
30-39 歳	32%	56%	12%
40-49 歳	28%	64%	8%
50-59 歳	32%	57%	10%
60- 歳	50%	43%	7%

60代からの回答数は16件と少数であったためこの年齢層に関して明確な傾向を読み取ることは困難だが、

tata/mama (動詞の三人称形) の使用割合が 60 代で若干多いことから、世代差の境界線がここにある可能性も考えられる。1994 年に実施された調査 (Kielkiewicz-Janowiak 2011) で動詞の三人称形をほとんど用いないとされた「若年層」が、本アンケート調査の 30 代から 40 代に当たると考えられ、1994 年当時では「若年層」に目立っていた傾向が、20 代から 50 代までの幅広い年齢層に共通するものとなったことを示唆していると言えよう。

世代別の傾向に加えて、回答者の居住地域別の結果 (表 4) も見ておきたい。

表 4

	tata/mama	ty	その他
大都市	30%	59%	11%
小都市	32%	59%	9%
村落	37%	55%	8%

回答の集計データから、居住地域ごとの対称詞使用の傾向にはそれほど目立った差が見られないことがわかる。地域によらず、全体的に親への動詞の二人称使用の割合が高い傾向にあり、これは方言研究の一部 (Sikora 2010: 131) で指摘されている内容とも一致する。かつては親への対称詞使用に地域差が見られたと考えられるが、本調査の結果から現在は特定の地域に目立つ傾向は見られないと言えよう。

B) 祖父母

祖父母への対称詞使用に関する項目では、「あなたは祖父母に対しどのように話しかけますか?」という質問に対し、以下の選択肢が与えられた:

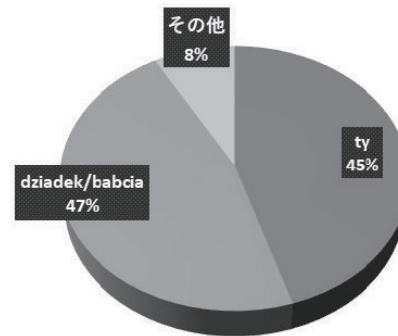
- *dziadek/babcia* (例: Czy dziadek/babcia napije się herbaty?)
- *ty* (例: Czy napijesz się herbaty?)
- その他 (コメント欄に記入してください。)

結果として、47% の回答者が *dziadek/babcia* (動詞の

三人称形) を、45% が親称の *ty* (動詞の二人称形) を、8% が「その他」を選択した (グラフ 2)。

グラフ 2:

あなたは祖父母に対しどのように話しかけますか?



親への対称詞使用に関する項目と比較すると、*dziadek/babcia* (動詞の三人称形) を選択した回答者の割合 (47%) と、*ty* (動詞の二人称形) を選択した回答者の割合 (45%) との間に、あまり差が見られない点特徴的である。これは方言研究における記述で言及されている (Sikora 2010: 132) ように、祖父母への対称詞使用においては古い形を用いる割合が高いという傾向の表出として読み取ることができる。また「その他」を選択した回答者のうち大都市在住の 50 代 2 名 (男性 1 名、女性 1 名) が *wy* (二人称複数形) を用いるという内容のコメントを残しており、これも親への対称詞使用に関する項目では見られなかった結果である。村落のコミュニティでは今もなお祖父母に対し二人称複数形を用いる地域があるという記述が先行研究に見られる (Sikora 2010: 132) ことから、*wy* の使用に言及している回答者の祖父母が村落在住者である可能性が高い。アンケート調査ではこの 2 名の回答者の祖父母の年齢や居住地といった情報にまでアクセスできなかったため、正確な背景を特定することが難しいが、少なくとも祖父母に対する二人称複数形 *wy* の使用が実例として存在することが証明された。

親への対称詞使用に関する項目の回答で見られた「混合形」について、祖父母への対称詞使用において

も同様のコメントが31件あった。このうち、「混合形」(対称詞 *dziadek/babcia* の呼格もしくは主格+動詞の二人称形)が *ty* (動詞の二人称形)と *dziadek/babcia* (動詞の三人称形)のどちらにも当てはまらないと判断した回答者が27名²⁶おり、前項目と同様に「完全な三人称形」と「完全な二人称形」の間を取った形が存在するという認識を読み取ることができる。「混合形」を用いる回答者が *ty* (動詞の二人称形)あるいは *dziadek/babcia* (動詞の三人称形)を選びコメントを残さなかった可能性も考えられるが、親への対称詞使用同様、「完全な二人称形」使用(対称詞 *dziadek/babcia* の不使用)への目立った移行は傾向として見受けられない。

親への対称詞使用に関する前項目と同様に世代別の統計データを抽出すると、以下のような結果(表5)が示された。

表5

	<i>dziadek/babcia</i>	<i>ty</i>	その他
19-29 歳	48%	40%	12%
30-39 歳	43%	49%	8%
40-49 歳	42%	51%	7%
50-59 歳	58%	35%	7%
60- 歳	53%	40%	7%

前項目の数値(表3を参照)と比較すると、各年齢層において動詞の三人称形(*dziadek/babcia*)を選択した回答者の割合が増加していることがわかる。すなわち、ここでも祖父母への対称詞使用においてはより古い形を用いるという傾向を読み取ることができ、特に半数以上が動詞の三人称形を選択している50代以上の年齢層でこの傾向が強いと言える。

居住地域別の集計データ(表6)でも、世代別の結果と類似した内容を読み取ることができる。

表6

	<i>dziadek/babcia</i>	<i>ty</i>	その他
大都市	45%	46%	9%
小都市	50%	44%	6%
村落	51%	43%	6%

どの地域でも動詞の三人称形使用の割合が親への対称詞使用の項目(表4を参照)と比べて高くなっており、ここでも地域ごとの差は特に見られない。方言研究の一部で、村落における祖父母への対称詞使用は都市部のそれと異なることが強調されている(Sikora 2010: 132)が、本アンケート調査の結果をふまえると、村落特有の傾向が見られるとは考えにくい。個別の村落ごとに対称詞使用の特徴が存在することは確かだが、その実例数は次第に少なくなっているのではないかと考えられる。

C) 義理の親

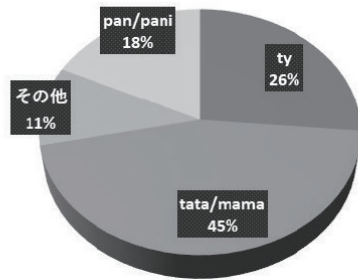
義理の親への対称詞使用に関する項目では、「あなたは義理の親に対しどのように話しかけますか?」という質問に対し、以下の選択肢が与えられた:

- *pan/pani* (例: Czy *pan/pani* napije się herbaty?)
- *tata/mama* (例: Czy *tata/mama* napije się herbaty?)
- *ty* (例: Czy *napijesz się herbaty*?)
- その他(コメント欄に記入してください。)

血縁関係のない義理の親に対しては一般的な敬称としての対称詞 *pan/pani* が用いられる可能性も考えられるため、親への対称詞使用に関する項目には無かった *pan/pani* の選択肢を加えた。その結果、45%の回答者が *tata/mama* (動詞の三人称形)を、26%が親称の *ty* (動詞の二人称形)を選択し、続いて18%が敬称の *pan/pani* を、11%が「その他」を選択した(グラフ3)。

グラフ 3:

あなたは義理の親に対してどのように話しかけますか？



前二項目と同様にここでも「対称詞 *tata/mama* + 動詞」の二人称形という「混合形」の使用に言及するコメントが見られたが、その数はごくわずか（8件）にとどまった。

この項目の回答で特徴的なのは、無人称形の使用に関する記述が複数のコメントで見られたことである。「誰に」対して発言しているかを明確にせず、「お茶を少しいかが？」といった無人称表現、または「(私が)お茶を提案してもいいですか？」²⁷⁾のような一人称表現を用いることにより、義理の親に対して直接呼びかける発言を避けた表現が可能となる。血縁関係にない相手という意識から、慎重に発言しようとする話者の意識が表れているとも言えよう。

義理の親との関係性は人それぞれだが、お互いに他人から家族になった関係性として捉える場合、語用レベルにおける対称性・非対称性もまた興味深いテーマである。この項目では、義理の親に対し回答者が用いる対称詞に関する質問に加えて、「義理の親が回答者に対しどのように発言をするか」という質問も設けた。回答の選択肢は以下の通り：

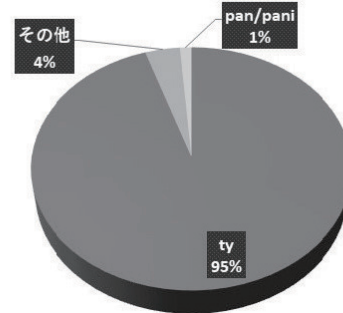
- pan/pani (例：Czy pan/pani napije się herbaty?)
- ty (例：Czy napijesz się herbaty?)
- その他 (コメント欄に記入してください。)

結果として明確な傾向が示された：義理の親から回答者(子どもの結婚相手)に対しては95%が親称の *ty*(動詞の二人称形)を用い、「その他」を選択した回答者

は4%²⁸⁾、敬称の *pan/pani* はわずか1%にとどまった(グラフ4)。

グラフ 4:

あなたは義理の親からどのように話しかけられますか？



この結果から、回答者から義理の親に向けた発言ではある程度の距離感を表現しようとする場合が一定数見られるのに対し、逆の場合、すなわち義理の親から回答者に向けられる発言では親称の *ty*(動詞の二人称形)が一般的に用いられる形だと考えられる。回答者が子どもの結婚相手の立場として選択した以上二つの質問に対する回答データ(グラフ3および4)をふまえ、義理の親との間には語用レベルでの非対称性が認められると言えよう。

D) 子どもの結婚相手

義理の親への対称詞使用については前項目で触れたが、筆者の実施したアンケートでは回答者に義理の親としての立場からも回答を選択してもらうため、子どもの結婚相手への対称詞使用についての質問を設けた。回答の選択肢は以下の通り：

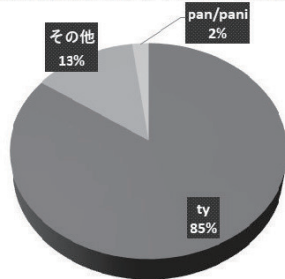
- pan/pani (例：Czy pan/pani napije się herbaty?)
- ty (例：Czy napijesz się herbaty?)
- その他 (コメント欄に記入してください。)

結果、85%の回答者が親称の *ty*(動詞の二人称形)を、13%が「その他」²⁹⁾を、2%が敬称の *pan/pani* を選択し(グラフ5)、回答者が子どもの結婚相手として選択した回答データ(グラフ4を参照)と類似した結果³⁰⁾と

なった。

グラフ5：

あなたは子どもの結婚相手に対してどのように話しかけますか？



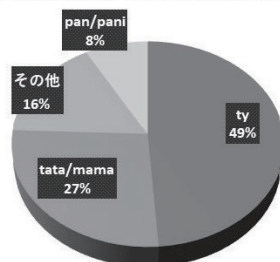
一方で逆の場合、すなわち「回答者の子どもの結婚相手が回答者に対しどのように発言をするか」という質問への回答データからは、前項目での結果（グラフ3を参照）とは少し異なる興味深い傾向を読み取ることができる。選択肢は以下の通り：

- pan/pani（例：Czy pan/pani napije się herbaty?）
- tata/mama（例：Czy tata/mama napije się herbaty?）
- ty（例：Czy napijesz się herbaty?）
- その他（コメント欄に記入してください。）

この質問に対して、49%の回答者が親称の *ty*（動詞の二人称形）を、27%が *tata/mama*（動詞の三人称形）を、続いて16%が「その他」を、8%が敬称の *pan/pani* を選択しており（グラフ6）、親称の *ty*（動詞の二人称形）を選択した回答者が20%以上多くなっている。

グラフ6：

あなたは子どもの結婚相手からどのように話しかけられますか？



前項目（グラフ3を参照）の回答コメントで「混合形」への言及がわずかに見られたが、この「対称詞 *tata/mama* + 動詞の二人称形」という表現が、義理の親には親称の *ty*（動詞の二人称形）として受け取られている可能性がある。発言する側の認識ではこの「混合形」が「完全な三人称形」と「完全な二人称形」の間を取る解決策だが、発言を受ける側、すなわち義理の親の認識ではこの「混合形」が親称の *ty*（動詞の二人称形）として受け取られるのではないかと考察できる。

もう一つ興味深いデータとして、子どもの結婚後の変化に関する以下のようなコメントも見られた：

Na razie narzeczona syna zwraca się do mnie per pani, ale przypuszczam, że po ślubie będzie mama, jak ja do moich teściów.

現時点では息子の婚約者は私に対して *pani* を使っていますが、結婚後は *mama* を使うようになると思います、私も義理の両親に対してそう発言していました。（女性、50代、回答は「その他」を選択）

Tu ważny jest parametr czasu. Córka jest 10 lat po ślubie. Zięć na początku (2 -3 lata) zwracał się nieosobowo.

重要なのは時間の流れです。私の娘は結婚して10年になります。娘婿は最初（2-3年ほど）無人称形を使っていました。（女性、50代、回答は *tata/mama* を選択）

これらのコメントから、結婚がひとつの節目となり、対称詞使用に変化が起こる場合もあるということがわかる。結婚前は敬称の *pan/pani* を用いたり、無人称の表現を用いたりすることで一定の距離を取り、結婚後家族の一員になると *tata/mama* もしくは場合によって *ty* を用いた表現に変わるということになる。このような内容を記したコメントは少数であったが、実例の記述として貴重な資料だと言えよう。

4. おわりに

家族間の対称詞使用に関する先行研究では、動詞の

二人称形と三人称形のみに着目した記述が目立ち、対称詞それぞれがどちらの人称形と結びつくのかに焦点を当てた議論が主である。しかし筆者が行ったアンケート調査の結果から、ポーランド語話者の言語使用意識において、この二人称形と三人称形の境界線はそれほど明確なものではないことがわかった。回答者のコメントでは「混合形」(対称詞としての親族名称の呼格もしくは主格+動詞の二人称形)についての記述が一定数見られ、動詞は二人称形ではあるものの、発言の中に対称詞が含まれる表現は「完全な二人称形」と異なるものだという認識を読み取ることができる。

祖父母への対称詞使用に関する項目では、三人称形を選択した回答者の割合(47%)が親への対称詞使用に関する項目(32%)よりも高かったことや、わずかではあるが二人称複数形 *wy* の使用を認めるコメントがあったことから、親よりも祖父母に対してより古い形が用いられていることがわかった。これは方言研究の記述でも強調されている点だが、本研究のアンケート調査により現時点での事例の存在が証明されたと言える。

義理の親と子どもの結婚相手の間における対称詞使用に関する項目では、「混合形」の他に無人称形への言及があった。発言を向ける相手を明示しないことにより直接的な人称表現を避けるという、義理の親子関係特有の傾向を読み取ることができる。回答者の残したコメントの中には結婚前後で対称詞使用に変化が起きたという記述も複数見られ、これは他人から家族になる過程が言語面にも表出している例として捉えることができよう。またこの項目では対称詞使用における対称性・非対称性についても考察を行うため、回答者には発言をする側・発言を受ける側双方の立場から回答を選択してもらった。回答データからは、子どもの結婚相手の用いる「混合形」がより親称の *ty* (動詞の二人称形) に近い形として義理の親に受容されている可能性が示唆され、言語使用意識における非対称性が示される結果となった。

調査結果全体から、ポーランド語話者は、動詞の人称形だけでなく、対称詞との組み合わせ全体として表

現のニュアンスに変化をつけていると考えられる。先行研究の記述でも指摘されている通り、動詞の二人称形使用の割合は増加傾向にあり、世代別・居住地別で見てもこの傾向はポーランド社会全体に共通していると言える。しかし同時に、特に親・祖父母それぞれの項目でこの傾向に差が見られるのも事実である。世代別に比較すると、親に対して三人称形を用いる割合は20代から50代までで30%前後、60代では50%であったのに対し、祖父母に対する三人称形使用の割合は20代から40代までで40%台、50代と60代では50%台と数値が高くなっている。また地域別の比較結果からも、親に対する三人称形使用に関しては大都市・小都市・村落のどの地域でも30%台であるのに対し、祖父母に対して三人称形を用いる割合は大都市で45%、小都市・村落では50%台と高くなっている。二人称形使用が全体的に多数派であることは明確だが、三人称形使用に着目した場合、祖父母に対してはより古い形を用いる傾向を読み取ることができる。すなわちポーランド語話者は、発言を向ける相手によって同じ家族内でも異なる人称形(二人称・三人称・無人称)を選択し、時にニュートラルな表現を用いながら、対称詞も相手に応じてそれぞれ使い分けているのである。

本研究で実施したアンケート調査は回答数430件という比較的規模の大きなものとなり、量的研究の資料として十分な結果が得られた。同時に、一部の質問項目で自由記述欄を設けたことにより回答者個人の経験や意見を知ることでもでき、質的研究の資料としても活用できる部分が多い。一方、アンケート調査では匿名性を重視したため、追加のインタビューなど回答者個人に直接アクセスする事後調査の計画が難しく、回答選択の意図などを詳細に確かめることはできなかった。以上の反省点をふまえて、特に対称詞を用いる相手(親や祖父母など)の世代や居住地について補足調査を行い、アンケートの結果考察をより充実させることが今後の課題である。

キーワード：ポーランド語、対称詞、呼称、親族名称

注

- 1 印欧語と中国語の人称代名詞に見られる安定性については三輪 (2000: 20-27) も詳しい記述を残している。
- 2 ポーランド語の敬称は数と性によってそれぞれ *pan* (男性単数) *pani* (女性単数) *panowie* (男性複数) *panie* (女性複数) *państwo* (男女混合複数) が使い分けられるが、本稿ではこれらをまとめて「*pan/pani* などの語」と記す。
- 3 標準ポーランド語で敬称として用いられる *pan/pani* などの語は動詞の三人称変化を要求する。この敬称 *pan/pani* の詳しい用法については筆者の別稿 (川本 2021) を参照。
- 4 本稿では三輪 (2000) の記述にならない、人称代名詞を含めた人称を表す語について人称詞と記す。
- 5 ポーランド語の規範文法では敬称として用いられる *pan/pani* などの語を代名詞として捉えることはないが、これを代名詞として記述するポーランド語研究者も少なくない (Łaziński 2006: 15)。人称代名詞 (*zaimki osobowe*) という表現が多く散見される Huszcza の記述 (1980, 2000, 2006) をはじめ、敬意を表す代名詞 (*zaimki honoryfikatywne*) という記述も見られる (Kotikowa 2002, Nowakowska 2011)。一方でこれらの語はあくまで代名詞とは異なる名詞として捉えるべきだとする立場もあり (Pisarkowa 1979, Łaziński 2006)、中には文法的な品詞分類にあえて触れない記述 (*formy grzecznościowe*) も見られる (Marcjanik 2006, 2014)。
- 6 他にも司祭に対して用いる *ksiądz* (司祭・神父) や、役職や職業を表す肩書表現として用いる *pan dyrektor* (男性の所長、部長) や *pani doktor* (女性の医師、博士) が例として挙げられているが、本稿では家族間での対称詞使用を取り上げるため上記の語に関しては詳しく言及しない。
- 7 ポーランド語はスラヴ語の中でも呼格が残っている珍しい例として取り上げられることもあるが、実際に日常生活の中で呼格を用いる文脈は限られている。具体的には、相手を呼び止める場面や会話の冒頭で用いる呼称としての呼格 (教授に対して「先生!」*Panie profesorze!*; 友達に対して「アニャ、聞いて。」*Sluchaj, Aniu.* など)、そして手紙やメール文の冒頭で相手に言及する際に用いる呼格 (「敬愛なる先生」*Szanowny Panie Profesorze*; 「愛しいアニャ」*Kochana Aniu* など) が主な用例である。しかし近年では主格が呼格に取って代わることも多く、伝統的には呼格が適用されていた場所で主格が用いられることも珍しくない。
- 8 例文【2】では二人称代名詞 *ty* が省略されているが、「忘れる」という意味の動詞 *zapomnieć* (完了体) が二人称単数の過去形を取っているため、ここでの人称は二人称だと判断できる。屈折語であるポーランド語においては、このように動詞の屈折を通して人称をはじめとした文法情報が伝えられ、人称代名詞が文中で省略されることも多い。
- 9 1917年、家族として生活している人同士の言語に関する調査がなされていないことを、J. Zborowski が指摘したことに家族間言語研究の原点があるとされるが、Zborowski は家族間で使用される言語を「方言」(*gwara*) と記しており、あくまで方言研究の一環として捉えていたにすぎなかった (Handke 2021: 75-76)。
- 10 Handke は指小形 (*formy zdrobniałe*) の他に愛称形 (*formy pieszczotliwe*) や指大形 (*formy zgrubień*) も家庭「内」で用いられる呼称の例として挙げている。
- 11 Handke は、この用法がまずシュラフタの貴族コミュニティで生まれ、17世紀後半ごろから農村地域や都市部へ広まっていったことについて言及している (Handke 2021: 103)。
- 12 主格はそれぞれ *zięc, synowa*
- 13 ロシア語やチェコ語など他のスラヴ語では現在でも二人称複数形が敬称として用いられており、ポーランド語でもかつては二人称複数形の *wy* が敬称として用いられていた。しかし時代を経て三人称形と結びつく *pan/pani* が標準ポーランド語の敬称として残ったため、敬称としての二人称複数形 *wy* は一部の地域のみで用いられるようになった。
- 14 Kielkiewicz-Janowiak は *mama* (母) および *tata* (父) の語について KT (kinship terms) の記号を用いている。また、三人称表現には数字の 3 を、二人称表現には 2p. をそれぞれ用いている。
- 15 設定された場面の一例として「チャンネルを変えてもいい? それともこれ見たい?」と父親に尋ねる場面が挙げられている (Kielkiewicz-Janowiak 2011: 50) が、他の場面については具体的に記述されていない。
- 16 Kielkiewicz-Janowiak の記述 (2011: 49-54) をもとに筆者が作成。
- 17 Kielkiewicz-Janowiak の表 (2011: 55) を筆者が改編・和訳。

- 18 村落に分類される地域それぞれにおいて、用いられる地域方言が異なることは周知の事実であるが、本アンケートでは、主に標準ポーランド語が用いられている都市部とは異なる対称詞使用の傾向を全体として把握する目的で、詳細な地域方言に分類した調査・考察は行っていない。地域方言ごとの特徴を考慮した調査・考察は今後の課題としたい。
- 19 回答者の学歴、外国語の知識、海外在住経験の情報は、主にアンケートの第3セクション以降で扱っている「親称 *ty* への移行」に関する項目の考察に反映させる目的で収集したため、本稿の考察には反映されていない。
- 20 本アンケートでは自分の子どもに対する対称詞使用を問う項目は設定しなかったが、これは①親から子どもへの発言が通常二人称形である（他人・家族の区別が明確である）こと、また②個人名やあだ名、親族名称の指小形（「息子」*syn*の指小形 *synuś*；「娘」*córka*の指小形 *córcia* など）の使用に関する内容が関わってくるため、二人称と三人称の違いに着目して設定した他の項目と議論の焦点が少々ずれること、以上二点をふまえて判断した結果である。
- 21 本アンケートでは回答ミスを防ぐ目的で複数回答を不可としたが、「その他」の選択肢を自由記述欄とともに設けることで、複数の選択肢に当てはまる場合はその旨を記入できるようにした。
- 22 選択肢それぞれの違いをより明確に示すため、「(お父さん、お母さん) お茶飲む？」という内容の例文を各選択肢の横に記載した。
- 23 本アンケートの回答者が用いている *forma mieszana* という表現に筆者が「混合形」の訳をあてた。
- 24 既述の通り、現代ポーランド語では呼格の代わりに主格を用いることも多い。注7を参照。
- 25 この混合形を *ty*（動詞の二人称形）として捉える回答者は5名、*tata/mama*（動詞の三人称形）として捉える回答者は2名いた。
- 26 この混合形を *ty*（動詞の二人称形）として捉える回答者は3名、*dziadek/babcia*（動詞の三人称形）として捉える回答者は1名いた。
- 27 回答者が具体的に挙げた発言例を筆者が和訳。ポーランド語の原文はそれぞれ以下の通り：*Może trochę herbaty?; Czy mogą zaoferować herbatę?*
- 28 このうち6名の回答者が「名前で」(*po imieniu*) という記述を残しており、「個人名+動詞の二人称形」の使用を示唆している。この記述から個人名の使用を「完全な二人称形」と区別する捉え方が認められるが、「混合形」のように複数の回答者に共通した明確な表現が特に見当たらないこと、また同様の回答数がきわめて少ないことから、本稿ではこの個人名使用に関して考察を深めるに至らなかった。これについては注20で言及した親から子どもへの対称詞使用に関する内容と合わせ、今後の課題としたい。
- 29 このうち1名の回答者が「個人名+動詞の二人称形」について言及しているが、注28と同様の理由で本稿では深い考察に至らなかった。こちらも今後の課題としたい。
- 30 「その他」の割合が若干多くなっている（グラフ4では4%、グラフ5では13%）が、コメントを残していない回答者が多くこの差については詳しい考察が困難である。数少ないコメントもほとんどが「子どもの結婚相手はいないが、もしいた場合～」という仮説的回答で、現時点での対称詞使用の傾向をはかる資料としてはふさわしくないと判断した。

資料一覧

〈引用文献〉

- Brown R., A. Gilman 1960. “The Pronouns of Power and Solidarity”, In: T. A. Sebeok (ed.), *Style in Language*, Cambridge: MIT Press, pp. 253-276
- Handke K. 2021. *Socjologia języka*, wyd. I (2. dodruk), Warszawa: Wydawnictwo Naukowe PWN
- Huszcza R. 1980. „O gramatyce grzeczności”, *Pamiętnik Literacki* 71/1, s. 175-186
- Huszcza R. 2000. „Jeszcze o honoryfikatywności polskich zaimków osobowych”, *Poradnik Językowy* nr 6: s. 21-30
- Huszcza R. 2006. *Honoryfikatywność. Gramatyka. Pragmatyka. Typologia*, wyd. II, Warszawa: Wydawnictwo Naukowe PWN
- Kiełkiewicz-Janowiak A. 2011. “Child to parent address change in Polish”, In: Jahr E. H. (ed.), *Language Change: Advances in Historical Sociolinguistics*, Berlin, New York: De Gruyter Mouton, pp. 45-66
- Kotikowa W. 2002. „Formy adresatywne we współczesnym języku rosyjskim, polskim i w amerykańskim wariacie języka angielskiego. Charakterystyka socjolingwistyczna”, *Poradnik Językowy* nr 1: s. 43-51
- Łaziński. M. 2006. *O panach i paniach. Polskie rzeczowniki tytułowe i ich asymetria rodzajowo-płciowa*, Warszawa: Wydawnictwo Naukowe PWN
- Malec M. 2001. *Imię w polskiej antropimii i kulturze*, Kraków: Wydawnictwo Naukowe DWN
- Marcjanik M. 2006. „ABC grzeczności językowej”, [w:] Bańko M. (red.), *Polszczyzna na co dzień*, Warszawa: Wydawnictwo Naukowe PWN
- Marcjanik M. 2014. *Słownik językowego savoir-vivre'u*, Warszawa: Wydawnictwa Uniwersytetu Warszawskiego
- Markowski A. 2018. *Kultura języka polskiego. Teoria. Zagadnienia leksykalne*, wyd. II, Warszawa: Wydawnictwo Naukowe PWN
- Nowakowska M. 2011. „Podstawy etykiety językowej w wybranych podręcznikach do nauki języka polskiego jako obcego”, *Acta Universitatis Lodzianis. Kształcenie Polonistyczne Cudzoziemców* nr 18: s. 201-209
- Pisarkowa K. 1979. „Jak się tytułujemy i zwracamy do drugich”, *Język Polski* nr 1: s. 5-17
- Rajchert R. 1991. „Sposoby zwracania się do osób drugich w języku rodzinnym mieszkańców wsi dziepół”, [w:] Handke K. (red.), *Regionalizmy w języku rodzinnym*, Wrocław-Warszawa-Kraków: Zakład Narodowy im. Ossolińskich – Wydawnictwo PAN
- Sikora K. 2010. *Grzeczność językowa wsi. Część I System adresatywny*, Kraków: Wydawnictwo Uniwersytetu Jagiellońskiego
- 川本夢子 (2021) 「ポーランド語の『礼儀』に関する社会言語学的考察：謝罪表現のケース・スタディ」『言語・地域文化研究』no. 27 東京外国語大学 pp. 271-286
- 鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』岩波新書
- 三輪正 (2000) 『人称詞と敬語：言語倫理的考察』人文書院

〈URL〉

Ankieter.pl: <https://www.ankieter.pl> (最終閲覧：2021年8月12日)